

信岡先生のこと

—序にかえて—

経済学部機関誌『成城大学経済研究』第142号は、平成9年3月をもって退職された、信岡資生名誉教授の長年に亘る学恩への感謝の意を表わすため、「退任記念号」として編集されたものである。

学外のドイツ語、ドイツ文学関係の先生方では、まず、先生が長年親しくおつきあいなさっている、東京大学名誉教授、元本学文芸学部教授濱川祥枝先生、愛媛大学名誉教授高橋信之先生より玉稿を賜った。また、日頃非常勤で本学部のドイツ語教育に御尽力頂き、また信岡先生を中心に行ってきた我々研究会の仲間でもある、法政大学の日中鎮朗先生、桐蔭学園横浜大学の鹿兒嶋繁雄先生も原稿をお寄せ下さった。

本学部では、池田浩太郎名誉教授からも御寄稿頂き、むろんまた現職の先生方の日頃の研鑽の成果を問う論文も数多く収載することができた。

このように多くの方々の御協力を得て、信岡先生に捧げるに相応しい立派な論文集ができあがったことは喜ばしい限りであり、多くの先生方の御尽力に心から感謝している次第である。

信岡先生は昭和54年に成城大学にご着任されてから、研究、教育面での御貢献はもちろんのこと、成城学園アルザス日本文化センター長をはじめ数々の役職に就かれ、大学および経済学部の発展と充実に寄与されたが、先生の御経歴と御業績については、先生自ら筆を執り御協力下さったので、詳細はそちらの方にお任せすることにして、私はこの場を借りて、若輩の身で僭越ながら、日頃の先生とのおつきあいのこと、先生のお人柄などについて少しばかり書かせて頂きたいと思うので、御寛恕下されば幸いである。

* * *

信岡先生のこと

我々のドイツ語教育界においては、先生の名前を知らない者は、いわゆるモグリである。大学院を出て新米ドイツ語教師になった者は、まず必ず、教科書、参考書や問題集などで、数多くの先生の名前を目にすることになるのであり、先生はこの世界では、日本有数の著名人なのである。しかし、この度先生がお書きになった業績リストを改めて拝見して、私は信岡先生がいかなる方だったのかが今になってわかったように思った。今触れた教育面での膨大なお仕事も先生にとってはほんの一部でしかなかったのだ。まずは、御専門のゲーテ、ヘッセやロマン派についての研究一因に先生は知る人ぞ知る L. ティークの研究家の一人で、内外のティークに関する学術専門書には、先生の論文が文献資料に挙がっているし、ティークの修論を書く他大学院生が関西からわざわざ上京してきて教を乞うたというほどののである一、さらにドイツ文学、文化全般にわたる翻訳、そしてもちろん辞書や参考書、雑誌などのドイツ語教育関係のお仕事、そして数々の講演や学会での要職にあつての御活動……つまりは、リストを見直しているうちに、大きな意味での日本におけるドイツ「文化」の受容や啓蒙において、先生の残された御業績がいかに大きなものであったのか、つくづく思い知らされることになったのである。今、私は「文化」という言葉を使ったが、それは、例えば私のようないわゆるドイツ文学研究者（ゲルマニスト）と言われる人間は、ともすれば自分の狭い研究分野に閉じ込もってしまいがちになるのだが、先生の場合は、語学・文学は言うに及ばず、政治、経済、社会、教育、芸術その他ありとあらゆる分野に関してドイツのことに精通しておられるからで、しかも先生は、過去の歴史的事象にお詳しいのは当然のこととして、常に最新ドイツ事情を吸収されるよう努めていらっしやるのである。そう思って先生の作られた、初級の教科書や参考書をもう一度読み返してみると、そのような大学生のためにお書きになった簡明な本の場合ですら、背後に先生の存在の大きさ、見識の深さや謙虚なお人柄が見え隠れしていることが改めてよくわかってきたのである。

信岡先生のこと

ここ数年来、大学は改革の大きなうねりの中におかれ、いまだ摸索の途上にあるように見える時期に、信岡先生のような方が退職されたことは、ぽっかりと大きな穴が空いたようでまことに残念ではあり、また私自身も大変心もとなく感じているが、先生の残された足跡を汚さぬよう、また公私にわたり先生から教えて頂いたことを肝に銘じて努力していかねばならないと考えている。

先生はお仕事の上では少しも気を緩めず、自己には厳しくありながら、また人に対してはまことに寛大な精神をもって向かわれる方で、六年前私が成城大学に転任してきた時から今日に至るまで、慣れないことが多く、いささか緊張を強いられるような場面もあったが、先生のお人柄と暖かい笑顔によってどれほど心がなごんだことか知れないし、私がミスを犯した時でも、本当に寛容な心で対処して下さいました。

また先生は大変幅広い御趣味をお持ちで、相撲、落語、歌舞伎といった日本の伝統文化を始め、西洋のものでは、オペラや音楽にも実にお詳しく、さらには切手やガラス製品、陶器などの第一級のコレクターでもあられ、お宅にお伺いした時には、その見事なコレクションの一部を拝見させて頂いた。

以上のことからわかるように、先生は、一見飄々としたその風貌と控え目な物腰の奥に、常に全方向の若々しい好奇心や情熱をもち続けていらっしや、我々はるか後輩の研究者たちとの会合の時も、座談の中心には決まって先生がおられ、興味の尽きない楽しいお話について膝を乗り出してしまふのがいつものことであった。(次手ながら、本論集に先生が寄せられた「私と成城大学(思い出すまま)」と題する文章の校正ゲラを拝見して、私は先生の自由闊達な筆運びに、またもや唖ってしまったのである。型にとらわれない自在なスタイル、溢れるユーモアや遊び心、余人の及ばぬ記憶力と観察眼、それはさながら、語りの名手によって書かれた珠玉のミニ・エッセイ集のごとき趣きなのである。皆様、ぜひ御一読を!)

信岡先生のこと

さらには、先生はまた大変オシャレでいらっしゃる。ある時先生は、ジーンズ地の上下のスーツに濃い色のシャツ、カラフルな絵柄のネクタイで会議で報告されていたことがあったが、少し長めの銀髪にマッチしたその服装での先生の立ち姿は実にキマッていてカッコよく、今でも鮮明に想い起こすことができる（もしも「××年度成城大学ベスト・ドレッサー賞」などというものがあったとしたなら、先生は必ず、その教員部門の受賞者の常連でいらっしゃったことでありましょう。）服装はその人の精神の現れであるのだとすれば、それは、まさしく先生のいつも柔軟で若々しいお気持ちそのものの表現であるように思えるのである。

現在先生は、『経済研究』にも何度か発表された、明治以降の日本でのドイツ語辞典の研究に携わっておられる。先日お会いした時、「もう少しで完成なのでしょうか」とお聞きしたところ、「いや、あれはまだほんの一部ですよ」と笑いながらおっしゃっておられた。完成すれば、日本のドイツ文化受容史にとっても画期的なお仕事になることは間違いない。先生の御研究が一冊の本となる日が今から待たれてならない。

先生は還暦の記念に『ばうぜ』という自伝のような御本を出された。その文章の行間からは、ここまで書いてきた、私が日頃感じている先生のお人柄が滲み出ており、また、ほぼ十年前にお書きになった時の先生のお気持ちは、退職されもうじき古稀を迎えられる今も少しも変わりがなくてあらうとお察しする。これ以上私があれこれ言葉を連ねるより、最後はその中の先生御自身の言葉に直接耳を傾けて頂くことで、締め括りしたい。

子供の頃、六十歳のお年寄りと言え、白髪で腰が曲がり、痩せ衰え、自分たちとは異次元の世界に住む人のことであった。ふと気がつくとき今自分自身がその年齢に達している。今の子供の目にはどう映っているかわからないが、自分ではそれほど惨めな姿になっていない気がする。幸いにして私は未だ現役にあり、やりかけの仕事を持っているし、またや

信岡先生のこと

りたい事もたくさんある。どこまで、どれくらいできるかはわからないが、できる限りやってみるつもりでいる。還暦といっても、ここで人生が変わるわけではない。還暦は人生の一つの通過点、これまで通りの生活の流れは途切れることなく続く。ただ、還暦を機会に時の歩みにコンマを打ち、一息ついて、来し方を顧みて確認し、行く末を計るばかりである。Eine kleine Pause —人生には飽きがこない。

* * *

信岡先生、いつまでもお元気で！ ますますのご活躍を心から祈っております。

平成10年10月

経済学部助教授（本論文集編集委員）

木 下 直 也